

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32645

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：24659247

研究課題名(和文)医療面接における教員からの振り返りに対する検討

研究課題名(英文)Comparison of the feedbacks by teachers in the medical interview training

研究代表者

原田 芳巳(Harada, Yoshimi)

東京医科大学・医学部・講師

研究者番号：90317884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：【目的】模擬患者(SP)参加型医療面接実習の教員からのフィードバック(FB)の内容、医学生に与える影響、教員用マニュアルの効果を検討した。【方法】実習を撮影したビデオの解析、SPと医学生に対する質問紙調査を行った。次年度に教員用マニュアルを作成して教員の研修を行った。【結果】SPや学生からの評価は良好で、「実際の臨床の話」、「学生同士の討論」に対する肯定的意見が多かった。教員用マニュアルを用いた研修により、FBの内容の偏りが減少した。【結論】教員用マニュアルを用いることでFBの偏りを減らし、FBに臨床の体験談や学生同士の討論を含めることで学習効果を高めることができる可能性がある。

研究成果の概要(英文)：Objective: Although teacher of various department are in charge of the medical interview training. We performed faculty development to train teachers efficiently. We examined feedback (FB) by teachers. Methods: A questionnaire survey was conducted at the contents of FB. Moreover, we analyzed the FB by videos. We went a similar survey in the following year. Results: There were many positive opinions, for example "the clinical experience of the teacher having been heard" and "there were many discussions among students". Conclusions: We considered the explanation of the teacher's clinical experiences is useful for students' improvement in motivation.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：医療面接 フィードバック コミュニケーション技術 教員養成 モチベーション 模擬患者

1. 研究開始当初の背景

(1) 医師となった時に必要な臨床能力の基本は医療面接法と身体診察法にあるといえる。医療面接教育は、わが国では早くは 1977 年から浜松医科大学がコミュニケーションの教育をしている。また、川崎医科大学が 1992 年度に「臨床実習入門」の評価法として OSCE (Objective Structured Clinical Examination) を日本で始めて導入した。その後、共用試験 OSCE が開始する 2005 年までに 77 校が医療面接を含んだ臨床技能試験を導入し、100%の大学(80校)で臨床実習前に医療面接・診察技法の学習を行うようになった。共用試験 OSCE が正式に開始されたので、全大学で模擬患者(SP)参加型の実習が導入されていると予測されている。

(2) T 大学では医学科 4 年生の共用試験 OSCE の直前に **SP 参加型医療面接実習**を行っている。少人数グループでの実習で多数の教員が担当している。教員は多岐にわたる診療科から担当してもらっており、その専門分野、臨床経験などさまざまである。教員の違いによる学生の成績や実習内容に差があるのではないかという意見がきかれる。しかし、予備調査では教員間で共用試験 OSCE の成績に差はなかった。**実習担当の教員からの振り返りについて SP・学生がどのように差があると感じているか、何を期待しているのか**は明らかではない。

2. 研究の目的

(1) 医療面接実習に **SP、学生が何を期待しているのか**を明らかにする。各教員からの FB の差を明らかにし、SP、学生からの評価と比較検討する。その結果を踏まえて、次年度には教員研修 (faculty development, FD) を行い、その結果がどのように医療面接実習に反映されるかを明らかにしたい。

(2) コミュニケーション教育の重要性が指摘されており、今後も多くの教員に実習を担

当してもらい必要がある。教員間の FB について検討し、**より効率よく医療面接実習担当教員を養成する**のが目的である。

3. 研究の方法

(1) 初年度調査

2011 年 12 月 5 日～14 日に T 大学医学科 4 年生 123 名を対象に SP 参加型医療面接実習が行われた。16 グループで 11 名の教員が担当した。実習のタイムテーブルはあらかじめ設定され、面接・FB の時間は決められていた。10 分で医療面接を行い、その後に面接を担当した学生の自己評価、学生観察者からの評価、SP からの感想を聞く。1 人の SP につき 2 名の学生が面接を行い、その後に担当教員から FB を行う。これを 3～4 回繰り返し、学生全員が面接を担当するようにしている。SP、学生、教員に質問紙にて**実習の内容、教員からの FB などについて調査**を行った。また、実習の内容を撮影したビデオより教員による FB の部分を書き起こした。**各 FB の内容を positive FB か negative FB か、また「コミュニケーションに関する内容」か、「医学的情報に関する内容」かに分けて検討した。**

(2) 教員のための FD の開催

初年度調査で得られた結果に基づき、教員用マニュアルを作成した。次年度の実習前に担当予定教員に集まってもらって FD を開催した。

(3) 次年度調査

2012 年 12 月 3 日～12 日に T 大学医学科 4 年生 129 名を対象に実習を行った。16 グループの学生を 14 名の教員(7名は初めての担当)が担当した。実習のタイムテーブルは前年度と同様にあらかじめ設定され、面接・FB の時間は決められていた。SP、学生、教員に質問紙にて**実習の内容、教員からの FB などについて調査**を行った。また、実習の内容を撮影したビデオより教員による FB の部分を書き起こした。各 FB の内容を初年度と同様に

positive FB か negative FB か、また「コミュニケーションに関する内容」か「医学的情報に関する内容」かに分けて検討した。これらの結果を初年度と比較・検討した。

(4) 倫理的配慮

本研究はT大学の医学倫理委員会の承認を得て実施した。学生、SP、教員には調査協力の有無について、さらに学生には結果は成績に影響しない事も口頭および書面にて説明した。学生、SP、教員とも書面で同意を得た。

4. 研究成果

(1) 初年度調査

質問紙調査では学生111名、SPのべ48名、教員のべ14名から回答が得られた。SPや学生からの教員に対する評価は概ね良好でグループ間で差はなかった(結果省略)。自由記載(図1)でも、学生・SP・教員ともに肯定的意見が否定的意見よりも多かった。自由記載では、肯定的意見として「経験に基づいたFBをした」、「学生全員に意見を言わせた」というものが多かった。また、コミュニケーションと医学的情報のどちらを重視したかという問いに対し、ややコミュニケーションを重視した実習であるという回答が多かったが、自由記載ではコミュニケーションに対する意見が多かった。教員によってはコミュニケーションと医学的情報のどちらに重点をおいてよいのか迷ったという意見がみられた。

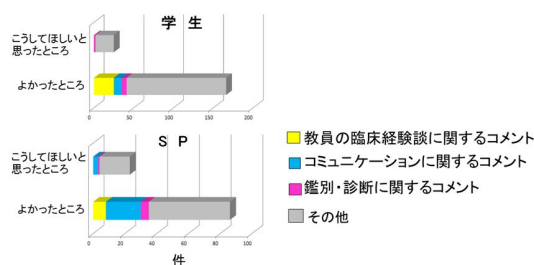


図1. 初年度の質問紙調査 自由記載欄の回答の割合

SPからは、教育技法についての意見もみられた。教員からのFBに加え、**学生同士の討論が期待**されている。学生自身の気づきが重

要であるし、新たに実習を担当する教員にも学生から意見を聞くことの重要性を周知するのが望ましいと考えられる。その他、教員の声の大きさや口調の速さについての指摘もあった。

ビデオは15グループについて検討できた(図2)。担当教員は全員が医療面接実習の担当教員としての経験があった。Positive FB / negative FBの比率は0~4.0、また「医学的情報」の割合は9~63%と開きがあったが、**同じ教員でもグループが変わると割合に変化**がみられた。「経験に基づいたFBをした」ことに対して最も多くの肯定的意見を得たグループでは、「抑うつ傾向にある患者においていかに沈黙の時間が大切であるか」という自験例を教員が時間をかけて説明していた。

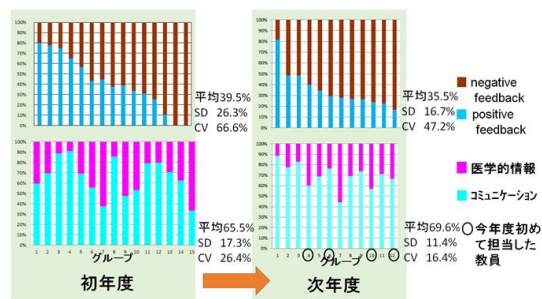


図2. 教員からの振り返りの内容の割合

(2) 教員用マニュアルの作成

初年度調査の結果をもとに、教員用マニュアルを作成した。マニュアルの内容は、「医療面接とは?」、「実習はどのように開始しますか?」、「教員からのFBはどうすればよいですか?」、「FBに詰まったときは?」、「評価シートはつけますか?」、「コミュニケーションと医学的情報とどちらが重要ですか?」、「OSCEの試験はどのように行われますか?」、「よくある敬語の誤り」、「わかりにくい医学用語」、「よくある質問」とした。

特に「FBに詰まったときは?」では、『教員に臨床で実際に経験されたことを話していただいたことに対して、学生からの反響が予想外に大きい』ことを以下の例を示して説

明した。例1) 上司との関係が悪く日頃からそれをストレスに思っていたが、なかなか周囲には言えなかった患者。そのストレスについてゆっくり傾聴したことで、涙ながらに感謝された。例2) 「うつ」の患者で、診療室に入っても話をしてくれなかった。しかし、十分に沈黙の時間をとることで、重い口を開いてくれた。例3) 医学的には正しいと考えられる対応であった。しかし、解釈モデルを聞かなかったために、患者の満足が得られる対応ができなかった。後に苦情を言われ、対応に苦慮した。

また、学生同士の気づきは、面接を担当した学生に深い印象を与え、学生を指名して発言させるのが効果的であることを説明した。

実習を前にマニュアルをもとにFDを行い、参加できない教員にはマニュアルを配布した。

(3) 次年度調査

質問紙調査では学生124名、SPのべ39名、教員のべ11名から回答が得られた。SPや学生からの教員に対する評価(図3)は前年度と同様に概ね良好でグループ間で差はなかった。前年同様に、「**実際の臨床の話が聞けた**」、「**学生同士の討論をした**」という肯定的意見が多かった。

ビデオは12グループについて検討できた(図2)。4グループは初めて医療面接実習を担当する教員であった。Positive FBの比率は初年度が39.5%(SD=26.3)、次年度が35.5%(SD=16.7)。「コミュニケーションに関する内容」の割合は初年度が65.5%(SD=17.3)、次年度が69.6%(SD=11.4)であった。いずれも初年度と次年度で差がなかった(Mann-Whitney検定 $P>0.05$)。

しかし、**前年度はpositive FBが0%のグループが2つあったのに対して、本年度はすべてのグループでpositive FBが確認された**。また、変動係数は、positive FBの比率は初年度が66.6%、次年度が47.2%、「コミュニ

ケーションに関する内容」の割合は初年度が26.4%、次年度が16.4%であった。いずれも初年度と次年度でグループごとの“ばらつき”が減少する傾向にあった。

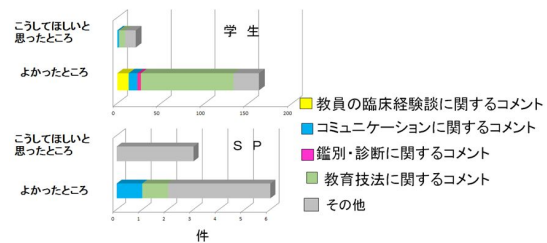


図3. 次年度の質問紙調査 自由記載欄の回答の割合

(4) 結論

SPや学生からどのようなFBが期待されているかを明らかにし、教員のためのマニュアルを作成した。特に、**教員が臨床の現場での経験談をすることによって、医療面接実習が単なるシミュレーションでなく、実際の医療でも有用であることを伝えて学生のモチベーションの向上につながると考えられる**。医療面接は比較的新しい分野であるが、教員養成にマニュアルが役立つと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 6件)

原田 芳巳、平山 陽示、井村 博美、和久田 佳奈、大滝 純司: 医療面接実習とOSCEにおける点数の実習指導教員別の比較検討-担当教員用のマニュアルの成果の検証 - . 第46回日本医学教育学会大会 2014年7月18,19日 和歌山県和歌山市

原田 芳巳、平山 陽示、井村 博美、和久田 佳奈、大滝 純司: 医療面接実習とOSCEにおける実習指導教員別の点数の比較検討 . 第2回日本シミュレーション医療教育学会学術大会2014年6月28日 宮崎県宮崎市

原田 芳巳、平山 陽示、井村 博美、和久田 佳奈、大滝 純司: 医療面接実習とOSCEにおける実習指導教員別の点数の比較検討 . 第173回東京医科大学医学会総会 2014年6月7日 東京都新宿区

原田 芳巳、平山 陽示、和久田 佳奈、
井村 博美、大滝 純司：医療面接実習にお
ける教員からの振り返りの比較研究-第3報
- . 第45回日本医学教育学会大会 2013年7
月26,27日 千葉県千葉市

原田 芳巳、平山 陽示、井村 博美、和
久田 佳奈、大滝 純司：医療面接実習では、
実際の臨床現場に基づく振り返りが期待され
ている . 第170回東京医科大学医学会総会
2012年11月17日 東京都新宿区

原田 芳巳、平山 陽示、大滝 純司：医
療面接実習における教員からの振り返りの比
較研究-第2報- . 第44回日本医学教育学会大
会 2012年7月27,28日 神奈川県横浜市

6 . 研究組織

(1)研究代表者

原田 芳巳 (HARADA, Yoshimi)
東京医科大学・医学部・講師
研究者番号：90317884

(2)研究分担者

平山 陽示 (HIRAYAMA , Yoji)
東京医科大学・医学部・教授
研究者番号：30246285

井村 博美 (IMURA , Hiromi)
東京医科大学・医学部・助教
研究者番号：50569415